

コムスタカ―外国人と共に生きる会 発足 40 周年記念講演会に参加して

アジア ソーシャルワーク創造協会 (ASCA) 副代表 星野晴彦

2025 年 10 月 5 日、熊本市国際交流会館において開催された「コムスタカ―外国人と共に生きる会」発足 40 周年記念講演会に参加した。

コムスタカは、移住女性や技能実習生等の移住労働者の妊娠・出産、労働、生活、家庭、在留資格など、在住外国人が直面する多様な課題に、草の根の立場から真摯に取り組み続けてきた市民団体である。技能実習制度をめぐる問題が社会的注目を集める今日、同会の四十年に及ぶ歩みは、支援実践の歴史として改めて深く刻まれるべきものであり、その不断の努力に心からの敬意と祝意を表したい。

講演会はハイブリッド形式で行われ、第一部では、慈恵病院理事長・院長の蓮田健氏が「異国の地で孤立する妊婦さんたち―産婦人科から見える世界―」と題して講演された。蓮田氏は、平成 19 年に「こうのとりのゆりかご(赤ちゃんポスト)」を設置し、令和 3 年には「内密出産」を導入するなど、社会的に大きな反響を呼んだ医療実践を主導してこられた。講演では、孤立出産に至る女性たちの背景が丁寧に語られ、死産や遺棄事件の背後にある「自己責任」論を問う視座から、日本社会の排除の構造を明らかにされた。欧米諸国の支援制度との比較を交えながら、医療と福祉の両面から人間の尊厳を見つめ直す内容であり、聴衆に深い感銘を与えた。

続いて、コムスタカ事務局長の佐久間順子氏が「在住外国人からの妊娠・出産相談と取り組み」と題して報告を行った。報告によれば、技能実習生を中心とする在住外国人から寄せられた妊娠・出産相談はこれまでに2020年から2024年までの5年間で、116件に及び、地域の支援者と連携しながら課題解決にあたってきたという。

特に印象深かったのは、2020 年 11 月に熊本県芦北町で発生したベトナム人技能実習生による双子遺棄事件を契機に立ち上げられたウェブサイト「日本でのにんしん (Pregnancy in Japan)」である。このサイトは、妊娠・出産・避妊・在留資格・費用・帰国出産・生まない選択などに関する情報を日本語・ベトナム語・英語で発信し、全国の外国人女性の命と尊厳を支えている。設立には、コムスタカをはじめ、アジア女性センター、熊本市外国人総合相談プラザ、熊本県外国人サポートセンター、熊本YWCA、弁護士会、医療従事者、上智大学の田中雅子氏ら、多分野の専門家が協働した。「孤立出産に至った女性を非難するのではなく、そうした状況を生まない社会をつくる」という佐久間氏の言葉には、支援実践の倫理が力強く息づいていた。

さらに、中島眞一郎代表による「コムスタカ 40 年の歩みと相談関係者からの報告」では、1985 年の創設から現在に至る活動の軌跡が紹介された。創設の契機は、急

増える外国人労働者の賃金未払いなど人権侵害が社会問題化する中、フィリピンの出稼ぎ女性たちの訴えに対し、手取カトリック教会のポール・マッカーティン神父が「日本人としてこの現実を見過ごすのか」と呼びかけたことにある。その後、国際結婚・離婚、DV、教育、介護、人身取引被害など相談内容は多様化し、1993年に現在の名称へと改称された。

今日のコムスタカは、外国籍住民の雇用、社会保障、家庭問題、人権擁護など幅広い領域で支援を展開し、行政・法曹・医療・教育など多職種連携の中核を担っている。2001年のDV防止法施行以降は、移住女性の被害者支援に注力し、熊本県・熊本市のDV対策会議の構成団体として、警察・家庭裁判所・福祉機関への質問や要望を重ねてきた。また、外国人のための無料人権相談、生活支援、啓発活動、映画会や学習会などを通じて、多文化共生社会の基盤づくりに寄与している。支援を受けた人々から寄せられる感謝の言葉には、同会が守り続けてきた多くの命と尊厳の重みを感じられた。

午前中には、フィリピン人会熊本(FOK)による外国人労働者向けイベントも開催され、コムスタカのメンバーが労働や権利に関する情報提供を行っていた。地域の中で多様な団体が互いに連携し、共に支援を展開する姿に、草の根の力強さと希望を見た思いである。

懇親会の席で中島代表が語られた「不可能に見えることにも逃げずに取り組むことで、互いに支え合い、その先に道が開かれる」という言葉は、まさにコムスタカの精神そのものである。異国の地で孤立する人々に寄り添い続けた四十年の歩みは、ソーシャルワークの根幹である「共に生きる」という理念を体現している。

福祉専門職として本講演会に参加し痛感したのは、日本のソーシャルワークがこの「外国人支援」という現実には、なお十分に応答できていないということである。制度の隙間に取り残され、声を上げることすら難しい人々に対して、私たちはどれほどの想像力と実践力をもって寄り添えているだろうか。コムスタカの四十年の実践は、その問いに静かに、しかし確かな答えを示している。支援とは制度の提供ではなく、「目の前の一人」と共に生きる営みであることを、改めて深く心に刻む機会となった。